Tulips
University of Tsukuba Library

＜巻頭言＞比較民俗研究の意義と将来

著者	張 紫晨
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	2
ページ	1-2
発行年	1990-09-30
その他のタイトル	<Preface>Significance concerning the Study of Comparative Folklore
URL	http://hdl.handle.net/2241/14197

『比較民俗研究』2．1990／9

比較民俗研究の意義と将来

張　紫晨※

比較研究は民俗学研究において重要な側面の一つである。民俗事象には時間的差異があるのみならず，空間的差異もある。時間的差異は歴史的な層次を現し，空間的差異は地域的相違を示す。しかし，この様な相違は比較することによってのみ明らかになるのであり，比較研究は各地の民俗を考える際，不可欠のものとなる。比較研究は同一国内の異なる地区で用いることもできるし，違う国同士の比較にも可能である。とくに同一の文化圏や同系の文化に属する国家間においては，それぞれの民俗文化の異同とその展開とを比較して，その中に歴史的関係や相互の影響を見出すことが重要である。

比較研究は視野を広め，研究の範囲を打ち破るだけでなく，人類の大地域文化の研究を可能にし，文化圏における地域の特徴および，民俗文化の変化法則を説き明かし得る。

また，これにより国家間の相互理解が深まり，国際協力と交流が進むのは言を待たない。各国の学者はこの様な研究交流を通して，一段と高い視点から通常なら見逃す多くの問題を発見でき，学問を進歩させることになるのである。

私は一貫して国際間の比較研究に意を注ぎ，大学院の指導でも常にこの事の必要性を述べ，この方面に必要な人材の育成に努力してきた。1985年以来，数度にわたり訪日し，国際学術会議に出席して，その感を益々強くした。民間伝承には国境があるとも言え，無いとも言える。それゆえ，多くの民俗事象は国境を越えた研究視野を持たなければさらに深く研究できないのである。東洋つまり中国，日本，朝鮮及び東南アジアは地理的にも近く，歴史的交渉もあり，文化上密接な関係があるので，互いに比較研究することは必要であるだけでなく，深い意義があるのである。

このたび，筑波大学の研究者によって研究会が作られ，雑誌も刊行された。日本，中国，韓国などの民俗研究を主な範囲とし，学術資料の情報交換や成果の発表の場ができたことは喜ばしい。私は賛意を表すと共に，及ばずながら尽力したいと思う。また，比較民俗研究に関心を持つ研究者は共に協力してこの事業の発展をはかることを期待したい。

現在，日中，日韓の比較研究はすでに始まり，多くの研究成果も出ているが，中韓の間ではまだ十分に研究は展開していない。中韓両国間の文化交流は歴史的に大変密接であり，比較研究が進展していないことは残念である。今日，この方面の比較研究を強化することは現代の研究者の要求だけではなく，歴史発展の必然でもある。文化の歴史的な起源とその展開の仕方は客観的な事実である。私たちの世代が研究しなければ，次の世代が研究するであろう。ならば，研究は早

※北京師範大学中文系教授・中国民俗学会秘書長

く始めたほうが良いし，後でするよりも，今，手をつけたほうが良いと思う。

日本では比較民俗学会の活動がすでにあり，今また筑波大学に比較民俗研究会が成立した。

韓国ではすでに比較民俗学会が成立している。また，中国民俗学会では中・日・韓の民俗の比較研究を重要視している。これら三国の民俗研究者の間では，国際学術会議や学術訪問・交流のおりに，いくどとなく学術交流・研究について意見交換をしたし，調査研究資料の交換をした。このことは三ヵ国間の民俗の比較研究を発展させるためには良い基礎であった。この様な学術活動において，意見の交換をすればするほど，民俗の比較研究の必要性を認識するのである。

この活動をさらに効果的に発展させるために，私はこの基礎の上に，国際的比較民俗研究組織として，中・日・韓三ヵ国が比較民俗研究会を設立させるべきだと思う。三ヵ国の民俗研究組織と研究者の代表によって，執行委員会を作り，運営に当たる。研究誌と比較民俗研究シリーズを出版し，学術会議を開催する。本部は日本に設けて国際比較民俗学シンポジウムを三ヵ国で交替に開く。このためには関係するそれぞれの国の研究者や学生・留学生の間の交流がさらに必要となり，今後の人材育成を期さねばならない。

と同時に三ヵ国間の比較民俗研究の雑誌を刊行することも大事である。すべての条件が揃ったとき，国際シンポジウムを開き，また学術討論会も一緒に行い，成立大会として挙行する。この提案が実現できるように心から期待したい。

現在，私のみるところ，多くの中堅の学者たちはこの比較民俗研究の構想に熱心に取組み，また，大きな希望を抱いている。このことは注目すべきで，彼等は研究上，実力を持っているだけでなく，構想計画にたいする意識が高く，しかも気概がある。彼等を根幹にすれば，この比較民俗研究は必ず雄大に発展することができるであろう。

筑波大学比較民俗研究会が創刊した『比較民俗研究』を起点にして，大いに前進したいものである。

光り輝く前途が眼前にあるのである。

1990年秋　北京

（何　彬　訳）